

平成一八年二月九日一五・一〇〇〜一七・〇〇

野田小学校 研修室

現職研修 校内講演会

講演テーマ

「ふるさと野田の歴史あれこれ」

講師 前自治会長 瓜生徳男様

みなさんこんにちは。先生の研修会と言う話で、小学校四年生へは河合為治郎さんの話に来ておりますので、そのくらいで軽く受けてしまったなと思って、あまり勉強しとらん者がと反省しております。

総合学習が始まってから中学校の三年生に一年に一回ずつ話に伺います。私が基本的に話を聞いて、その後で学校からこの部門はこの人と頼んで五人〜一〇人で、それぞれ授業をしています。

私は村の歴史とか組織とかの話をするのです。中でも一番子どもたちに言う、言ってもらいたい、実行してもらいたい事は、「水を大切にしてもらいたい。」「電気を始末する。」「食べるものを大切にする。」「無駄の無いように、その三つは、いつも話をするのです。」

私の家が養豚農家で若い時分から豚を飼ってあって、豚には穀物を食べさせます。

その穀物のうち九九％はアメリカからの輸入です。それで先物を買った場合もありますので、相場を眺めたりもしています。一〇人ぐらいのグループでどうもろこし等を買うわけですが、その一年先物を買ったり半年先物を買ったりして予測をしてやるのです。だから、穀物の相場とかそういうものには関心があります。それは即、自分の金儲けにつながります。そういったことで穀物についていつも関心を持っています。

今、二一世紀に入りまして、二〇世紀は石油の世紀、二一世紀は水の世紀と学者や専門家が言っています。水と穀類は一体の物でございます。水が無ければ穀物は出来ません。日本の食料自給率が四〇％とわられています。これはカロリーベースで、四〇％しか自給していないということ、六〇％はみな外国から来ているのです。その一番の原因が、肉食、肉を食べるようになったのが一番の原因です。今、牛肉のアメリカからの輸入はストップしています。牛肉を一キロ生産するに一四キロの穀物がある。同様に豚が七キロ、鳥は四キロぐら

いのです。自分たちが、ご飯とか、うどんとか、穀物を直接的に食べるものと、肉に変わったり、卵に変わったり、牛乳に変わったりして間接的に食べる物そういったものを合わせますと、四五〇キロから五〇〇キロぐらいの食べ物を必要としています。人間一年間一人、四五〇キロ〜五〇〇キロの食べ物、穀物を摂るには水が皆いるわけです。そこで、水がどれくらい要るかというところ約五〇〇トン、間接的に食べる物から摂る水が約五〇〇トンです。それで、生活水はどれくらいかと言うと、野田は下水で処理していますので一日の量が出ます。それで逆算していきますと、一人一年間に一〇〇トン、一日にしますと三三〇リットルぐらいの水を使うのです。それで、今、宇連ダムは一〇％しかない状態ですが、世界的にみても水が不足しています。しかし、ダムはあまり出来ないし、この野田地域も水をいかに少なくするかと、土地改良でパイプラインを計画しているのです。今までは水路に水を流して田んぼで米を作っていたのですが、今度はパイプを通し田んぼに水を運んでいけば今までの約四割ぐらいで済む、非常に水の節約ができるということで、そ

の工事を、お金をかけてやっております。私も、いったいどれくらい水が、一反の田んぼで米を作るに要るか、県の連中に質問したことがあります。それによって管の太さが決まってきます。話し合いの中から、だいたい一反の米を四ヶ月養うのに、水が一五〇〇トンから一八〇〇トン要ります。そうすると、一キロの米を作るのに四トンの水が要るといふ計算になります。卵や肉や一キロ作るのに六トンの水が要る。それだけ膨大な水がないと生産ができないのが現状でございます。だからこそ少しでも水を始末する。有効に使うということです。子ども達にも水について、中学生になると朝シャンをやる、「水がいるで、やるじゃないぞ。」とか、水を使わんような話を常にするのです。

水と食べ物について考えてみると、日本の場合は田んぼを、米を作らせんようにして、生産過剰で調整をしているのですが、世界的にみれば、だいたい一日一ドル以下の生活をしている人が八億人ぐらいで一日二ドル以下がだいたい三〇億人、そうすると全世界の人口の約半分近く、四〇%ぐらいの人が約二ドル以下の生活、それに比較すると日本は贅沢三味で飽食で、無駄が多いわけです。農林省が全部輸入食糧、国内の生産、それではじき出すと、一人の一日に採るカロリーが二六〇〇カロリーから二七〇〇カロリーだそうです。それだけのカロリーが日本で消費されている。別に厚生省の方が実際に食べた量でアンケート等もとって計算していくと、二〇〇〇カロリーであったそうです。そこに一人一日当たり六〇〇から七〇〇の無駄がある。その分をコンビニとか料理屋とかで、それだけ無駄にして廃棄しているということになります。それさえなくすれば、まだ日本人が四〇〇〇万増えても今の生活ができますよというデータが出ると嬉しい。それだけ日本が食べるものに対して贅沢三味で過ごしているという事が現状だと言うことが言われています。先生方が子どもに、「水を大切にせよ」、「食べ物に大事にせよ」、常々言っているとは思いますが今後ともそういった協力をお願いしたい。

それではレジメの順に、お話したいと思えます。江戸時代は野田が一二の集落に分かれておりまして、例えば、芦は芦村、南は南村、彦田も彦田村、みな村がついといつたわけです。統率していた庄屋さんが地域を治めとったということで、上野田と下野田に分かれとった。南、彦田、雲明が下野田、それから、保井、東西馬草、今方、市場、北海道そっちが上野田、どういう上か下か、伊勢神宮に近い方が上で離れ取るほうが下、そういうことを言っております。明治四年に廢藩置県になって、それぞれの地域が合併へ入っていくわけですが、そのあと上野田、下野田は一応二人の庄屋がいて治めていたのですが、実質的には、だいたい同一行動をとっていたようでございます。そして明治一七年に野田、芦、仁崎、大久保、この四か村で、代表者が出て、戸長をやった。戸長って今で言う村長さんかな。そういう形で戸長役をまとめて、それから明治二三年、この四か村が合併した。あくる年に大久保は田原町に出た。明治二四年に、現在の野田の状態が出来上がった。

が盛んになった。ばくち、酒、そういう形で生活が乱れてきた。今では酒で身上潰す人はないのですが、昭和三〇年ごろまで一日働いても今の二級酒が買えなかったのです。土建屋で昭和三〇年ごろ一日三〇〇円の稼ぎで、二級酒が五〇〇円でした。それくらい酒は値が良くて、酒を飲んで財産を無くした人は何人でもございます。そういう状況で、村がすさんどったというか、荒れとったんです。それを何とかしなければならぬということ、時の幹部が、村の建て直しを図ったのですが、誰が来て講演してもなかなかそれが直らなかつた。

それで、今、平野屋さんがありますが、平野屋さんのおじいさんのおじいさん、その人が今の雲明の集会場のある所に、平野屋の本屋があつた。大きな商売をやつていた。その番頭に又助さんという人が遠州の気賀から来ていた。そこで大平野屋の娘さんと一緒になつて、今の平野屋の新家を作つた。ということださうです。その又助さんが、家の在所のほうでは、二宮尊徳の教えで、いろいろ農業の改良だとか、人づくりをしているよと紹介した。当時の為治郎さんも一人ですが、為治郎さんと三〇

前の幹部がそっちへ研修に行つて、稲の作り方だとか、菜の運営だとかいろいろなことを勉強して帰つて来た。そして、こちらもそういう会をつくらうじゃないかという事のできたのが『報徳会』。明治二〇年ごろからそういう動きはあつたのですが、明治二六年に法華寺で第一回の総会をやつた。これを野田だけじゃなくて、渥美のほうからも郡一円から来たと、一番遠いのが豊橋の石巻の方から来て、年一回とか二回の会合でいろんな勉強会をして、それが元になつてだんだん部落が落ち着いてきた。当時の教えというのが尊徳の「わが道は人々の心の荒廃を拓くのを本意とする。一人の心の配ない。」結局、人づくりが一番先だと、さうすれば、どれだけの荒れている土地があつても、それは後には立派な田んぼ、畑にしますよ。その教えで、勤儉上、「勤労」「分度」「推譲」、この三つを基本としていた。馬草から山田寿二さんという方が東京へ出て会社を起こした。自分が難儀をして会社を起こし、成功して数年後には社会奉仕をした。『報徳』の勉強をすっかり身につけて、それを実践したということ。昭和

三〇年代の後半には、寿二さんの報酬がだいたい一千万、当時の一千万というのは大きいです。それを全部社会奉仕に寄付したと聞いています。普通ですと会社から学校へ寄付をすると、会社の利益から経費で落ちるわけです。寿二さんは自分が税金を納めて、残りのお金を寄付したということださうです。非常に報徳的な考え方で実行した立派な人だなあと感じました。野田小の校訓の「がんばろう、たすけあおう、ためになろう」、それから中学校の校訓は寿二さんがした「明朗、勤勉、奉仕」これもやはり二宮尊徳の「勤労」「分度」「推譲」これとだいたい考え方が同じで、野田小中学校の校訓として寿二さんが送ってくれた言葉と思つております。

会が趨勢になりまして、ある程度貯蓄も出来てきた。今のままでは生産が上がらないということ、耕地整備事業に取り掛かつていきます。これが明治二九年で、時の為治郎さんを委員長として、時の大勢の役員の方々がバックアップして、耕地整備事業が始まっていくのです。当時としては大事業だつたと思いますし、全国でも先駆けてやつていくことでした。私も旅行で、松任

市へ行った時に改良碑で整備の記念碑が建
ってしまして、明治四〇年だったか野田と
同じくらいの時期で早くから土地改良に取
り組んだものだと思います。

野田でも村の者が協力して耕地整備した。
今の耕地整備は、今、大久保でやっとなるの
を見れば判るのですが、整備は全部業者に
任せます。すると業者が全部機械でやって、
地主は一切作業には出ません。しかし、当
時は重機もなにもありません。主体が手作
業でしたから地主が作業に出て、そこで日
当をもらって生活の足しにしたという整備
でした。一〇アール当たり二〇円ぐらいか
かっとなるのです。その時のお金とすれば非
常に大変であったと想像しております。そ
れで、これができてから生産、能率が上が
るのです。

しかし、お金が払えなくて土地を離れた
人もいたのです。今現在、野田にある水田
は約二五〇〜二六〇町歩あるのですが、そ
のうちで七〇町歩が他へいっています。野
田以外に赤羽根が四五町歩とか白谷とか宇
津江とか、土地が野田以外の人にいてお
ります。それがどういふことかというのと、
明治時代の耕地整備は経済的にだめだった。

そのときに土地を野田の人に売れば、誰々
が土地を売ったというのが判っちゃいます
ので、不動産屋が赤羽根とか宇津江とか、
そちらへ行くことになる。米が主のときで
ございますので、米が無いので野田の田ん
ぼ年貢で分けると言うことで、みなそちら
へ流れる。それが七〇町歩のうちの六割ぐ
らいだと思います。

その後は明治二二年のマッカーサー指令
で農地解放があったときに、小作人してお
った人がそちらに行った。そういうことか
ら、約七〇町歩の三割弱が野田以外の人の
所有になっていきます。しかし、整備した後、
非常に生産が上がってきたということで模
範村として内務省から表彰されたのです。
そのときの副賞が五〇〇円、今の金にする
と約一千万円の賞金になっていふのです。
全国から視察に来たということが記録に残
っております。

耕地整備を為治郎さんが中心人物として
行ったのです。これまでには為治郎さん村
長を何回かやっております。いろいろな義
務教育委員だとか農業委員だとか渥美郡の
そういふ仕事やっております。明治大
正ぐらいまで農作物は米が中心です。米以

外はお金にならないのであくまで米の増産
を図ると言うのが一つの地域の一番の力入
れた産業でございます。その他、明治時代
に養蚕と植林を振興した。養蚕は農家の副
収入として非常に明治の後半から大正、昭
和の始めまでは、そういう伸びたのです。
今は、自動車だとか半導体が外貨を稼ぐ一
番もたになっておりますが、その大正、昭
和の初期は生糸が一番のもたになっておっ
た。それから植林の推進は山へ木を植えて、
今は、山は何もなんなのですが、当時は薪
の柴が良く売れたので、非常に植林も推進
した。そして、養蚕は「野田史」には資料
がなかなかなくて載せられなくて残念だっ
たんですが、今の中学校の向こうに住宅が
固まっておりますね、あそこに「野田蚕種」
と言うのがありました。それが大正八年に
浅野太一さんを中心になされた。木造の学
校の校舎みたいなのが三棟あって、そこで
蚕を交配して小さい幼虫みたいな蚕を作っ
て、それを渥美郡もとい東三河もとい伊賀
の方から長野の方まで、そっちまでみな出
荷していたのです。出荷してからも指導員
が行って地域の指導をしたりもしてしまし
た。「野田蚕種」は当時から東海一円にかけ

て事業を展開していました。

昔は、若い者の人材養成と言いますか教育機関として、大体二年の交代で将来役に立ちそうな人を村役場に入れて二年間勉強させていた。それで、野田の場合は蚕種組合と役場が、農協はちょっと落ちるわけですが、教育して二年経ったら交代して年代が経ったら野田のリーダーとなる。そういう養成機関としていたのです。

それから、平沢池の造成ですが、昭和の六、七年ごろ、みなさんはコトギスに毎年登っていますね、あの池がそうです。昭和の初期アメリカの金融恐慌から始まって世界恐慌になりました。特に農村の被害が大きくて米の値段が暴落しちゃって、農村経済が成り立たんということで県から補助金をもらいまして作ったのが、あの池でございませう。当時のお金で一万円で出来上がっています。そこへ村の者が大勢働きに行った。だいたい日当が男で八〇銭、トロッコを押す人が一円でした。一万円で池ができたわけですが、今では何十億円になります。神戸は土地改良事業で耕地整備をした。そのような各事業がそれぞれ働く場所を作るのが一つの狙いで事業がされました。

次に、戦争による食糧難と書いてありますが、これは昭和何年か、食料管理法という法律が出来て、ピシヤツとしめられちゃって、この法律は何年か前までは生きておって、ぼくも東京に田原の駅から米を送りに行ったが、受け取ってくれなくて大豆だと言えばいいが米だと言えばダメで、それで今は管理法がなくなって米の売買する業者として申請すれば農家でも米が送れるようになったのです。ほんの最近までそれが生きていて、そのために非常に難儀をしたのです。

野田から成人前からだいたい二〇代のほとんどの方が戦地へ行った。そういうことで働き手が無くて生産が上がらない。それから、もう一つは肥料も何も無い、戦争が末期になってくると何にも無しになっちゃう、生産が上がらなくて食べる物にも事を欠くように、農家でもそのようになったのですが、私がちょうど昭和二〇年が四年生、戦争が激化してきたのが一九年です、三年生の時です。今の運動場の面積が約半分だった、それを全部開墾して芋を作って、その芋が給食に出たわけです。まずい、まずい芋でも納得したのです。家から小学校

はみな弁当を持ってくるのですが、おかずと言うものは何も無くて、梅干だとかを持ってくるだけで、たまたま学校で味噌汁を給食で出して、牛を二頭か三頭、青年学校で飼っていて、その牛乳が出たわけです。

それが牛乳だけじゃなくて、芋のつるを入れた牛乳、いろいろなものが入った牛乳が出てきて、それがどうにも飲めなくて、その時から牛乳を一切口にせんようになって嫌いになった。そう言う事から給食だと、芋がだぁーと、弁当が無いときに、個人の家へ行って同じことで、農家でも自分で食べる米は一年のうちに半分しかない。当然、麦だとか、芋だとか、そういうものが米の代わりになっていたのです。腹が減るので、どうにか食べたのですが、今でも想像以上の食生活、どこの家でもみなそうです。一方では戦地へ行かれとるで、戦争行つとる人の身になれ、がまんしろと子どもにまで、そういう形で言っていたのです。

小学校四年生から勤労奉仕ということで、私なども麦刈りだとか手伝いを兵隊に行つとる家庭へ手伝いに行つたわけですが、授業はしたり、しなかったりであったような記憶でございませう。ちょうどここに報恩殿

というのがあって、そこでの朝礼で、校長先生の話では教育勅語を暗記させられました。

子どもの時の一番嫌な思い出が「村葬」でございます。兵隊へ行った方が亡くなった時に小学校三年生以上ぐらいが運動場で一時間半ぐらいはかかる。それぞれ偉い人が弔辞を読んで一時間半から二時間ぐらい立ってやる。そうするとね、ぼくも一回倒れなかったけれど倒れそうになって先生が抜き出して、何人かばたばた倒れました。夏で炎天下、直立で葬式、それが一番嫌だったのです。出征兵士を送るのは旗を持って、みな門先まで行って村の人らと一緒に兵隊さんを、歌を歌いながら送った。そういった記憶があります。

何にしても昭和三〇年ごろまでは食糧難で、みな難儀をしていました。大阪、京都方面から買出しをしていました。米をみな欲しいのです。でも売る米は農家にもございませんので、芋とか芋きりとか、そういったものをリュックサックにいっぱい買って帰っていくのです。そういった行列が、国道を歩いていた記憶もございます。しかし、餓死したということは割合聞いたこと

は無いです。他の国ならば相当餓死者が出ているのですが、日本ではあんまり餓死したということ聞いたことはありません。

私の知っている文化戦史の先生やっていた人の話ですと、農家でないと食べる物が無いから、全部ヤミ、芋を買うにもヤミです。それで報徳的な生き方をしてヤミをやらなうとすると、繭の中にさなぎがいる、そのさなぎを食べて自分がうまいと言っているのです。ぼくらは見ただけで、遠慮しませんでした、小さい子どもに食べさせたとやうの話を聞いてね。やっぱり当時の生活では食糧難でヤミに手を出さなかった人は、そういった生活をしたのかなあ。安心すると同時に驚きがありました。昭和三〇年ぐらいはこんな具合でした。

今は支出に対する食費の割合というのは今二四、二五%ではないかと思うんです。

この終戦直後は五〇%近い、エンゲル係数は五〇%、ほとんど食べる物に高いはずで、それだけ食べる物の値が良かった。私が三二年に農協の職員になって、その当時の高校卒で女子の初任給が三三〇〇円、まあ農協は先生と比べれば安くて三三〇〇円。米

が一俵三七〇〇円。そうすると一か月初任給では米が一俵買えなかったということで、すべて食糧だった。卵が一〇円、牛乳も一合一〇円、そういう時代だった。

それから、野田中学校の建設でございますが、教育法が改正されたのが昭和二二年です。それで新制中学校ができるということで野田中学校建設に入った。ここに一棟、校舎が北校舎が始めにあって、その古い校舎を三教室分かな、この古い校舎を小学校から置いてきて、あとは先程言った野田蚕種の建物、その中へ一学年。その当時、成章の分校がございまして、分校は新校舎に入りました。その後、新しい赤瓦の校舎を作ったのです。その校舎を作るお金が区有林を伐採して売ったお金で学校を作った。比較的、野田中学校は早く校舎が出来たのです。

その区有林は仁崎、上が上がって右に曲がったところにズル川、その周辺の二〇町歩が野田の区の山です。それからあとは野田鉾山。ここから芦ヶ池から赤羽根へ行く道の反対側、土を取って置いていた所、その木も伐採して、当時は、柴、薪が無かったので値良く売れた。ある程度金が出来て

中学校が出来た。そういうふうに言われております。それで今度は二〇町歩以上の山林へ植林をしなければいけないと、中学校がやるということになり、河合要先生と鈴木新平先生が黒松の苗を、種を蒔いて苗を人ねて、苗を作った。そして、子どもが生徒が植林に出かけた。おそらく一〇年ぐらい、僕らから始めて一〇年ぐらい続いたではないか。

「校長先生らも？」

「ぼくらもやった、やりました。あの仁崎に行つて。」

そうやって植林をして山を復元した。そういう区有林があったおかげで比較的早く、中学校が出来た。それで昭和二六年には青柳地区が植林の尊体で、模範尊体ということで視察に来ている。まあ減多に渥美半島のほうへ知事が視察に来るということはないんですが、そうして来ている。区有林の山は、明治時代に確保したのですが、全部水の確保のために周辺の山林を確保したのです。野田の区が買い取った。そういう事で山があったわけです。それで、その山のおかげで、いろいろな形が今日まで続いておる。

次に、野田の組織とか運営についてお話しします。昭和三〇年に合併いたしました。

野田、神戸、遅くなって平成に入って田原町と、今の田原町が出来たのです。その時、野田は村長に代わる役職として大総代という役を残しました。今の公民館の館長、他の地域はなかなか整わなかった。それで大総代の任期を二年にして、だいたい初代は今の町会議員の河合之示さんがやって八年、そこに保育園が出来たので保育園長も兼ねていた。それで、その下に各部落に総代、それから区議員、そういう組織で村を運営したのです。

私も昭和五〇年に議員になりました。議員の連中といろいろ話をする中で、

「野田は一番封建的だ。」

と、みなが言うのです。

「どこが封建的だ。」

と言つては論議をしたのです。

この私も六年間、自治会長になって、各総代、六総代にいろいろ言ったり状況を見ていました。

「野田ほど民主的などころは無いです。」

と力説したりしておりました。そして、その裏を返せば、ある程度民主的な、そう

いう地域でなければ、部落がいろいろ揉めとったりしては大きい仕事は出来ません。

私も一番の基本は、

地域の円満、円満な地域を作るのが一番大事。

円満な地域を作るにはどうするか。

若い者をいかに育てるか。

若い者を育てるか、と言う事は、

若い者にいかに責任を持って仕事をさせるか。

だから、野田の場合では、スポーツ大会やサンテパークの夏祭りでも金を渡すからと若い連中に全部をやらせてもらっています。行政は一步下がってやらせておるのです。そうすればみな責任を持ってちゃんと立派にやる。それが一番若い者を養成する一番手取り早い道だと考えているのです。そういう事で、非常に地域が円満にずっときているのです。

もう一つ、野田の場合は毎月一回、各集落で寄り合いをしております。そこで、どんなことでも全て情報を流しております。例えば、小学校の移転問題でも、皆にこういう状況ですよと、そこでまた意見を聞いたやつを、ここでこういう意見がありまし

たよ。とそういうことを全員に情報が伝わっておるために、途中でひっくり返したり、がたがた揉めるといふことはない。

もう一つは、昔から野田は水田地帯です。水田というのは、水が共同管理でなければできません。どうしても自分だけ水を引くということとは出来ないのです、共同管理。そこに協調性が無ければ水の管理は出来ないということになります。

そういったことが積み重ねて、今の野田のまとまりだとか協調性だとか公平的な考え方とか、そう言ったもんが生まれているのではないかと、他の地域を見て強く感じています。

それで、何年前ですかね、地震の問題で、防災組織の事が非常にやかましく言われました。私も淡路島へ行きました。そこに救出されたほとんどが隣近所、部落の者がやっていたと言っていました。消防署とか警察だとかは間に合わなかった。みな隣近所で全部救出したということを知っていて、やはり防災ということ一つ考えましても自分さえ良ければとか災害避難で隣は知らんよと言うような考え方じゃなしに時代は逆戻りをして、昔の明治時代のような地域のつながり

があれば防災やいろんな災害が来ても怖くないよと思います。地域の連帯さえしっかりしておればと、そういう事を強く感じたのです。幸いにも野田の地域は、連帯意識が未だに強く残っている。それで、安心しておるのです。

先程も、校長先生と話をしたのですが結婚できない人間が増えていまして、そういったあれがどうなっていくか非常に心配しております。

それから大きな事業として、昭和五一年県営圃場整備事業を行いました。これは明治の為治郎さんがやったときから、これまで動かさなかったのですが、ここで経営規模を大きくしないといかんと言うことで、一反、一反の区割りを三段に批准にして調整を致しました。

そして、平成三年には「ほると台」の造成、これは子どもの数が減ってきてて中学校の改築、建設問題にも絡みまして、子どもを増やさなければと言ふことです。

それから、元年には「芦が池の改修」、約五〇万トンであったものを今二〇〇万トンになっています。農林省に野田の区の所有地を貸して農林省が工事を致しました。そ

れに伴って、比留輪という芦が池の上の方の畑を整備しました。それと同時に元年から下水事業をやりました。

そして、こういった大きな事業を野田が元年度に完成した。その裏には、お金が伴うわけでございまして芦が池改修工事では面積として約五〇町歩、その一部をサンテパルクにとったりしまして四六町歩ぐらいを農林省へ貸しました。借地料として一二億の金が野田に入りました。その代わりに水が必要なうちは永久に貸せるわけです。今後、人間がここへ住んでいけるうちは貸しているという条件でございまして。そのお金があつたおかげで、圃場整備事業、下水事業こういったことが、下水でも一割の自己負担額、だいたい一戸当たりの費用が自分の宅内は除いて門先まで来る費用が五〇〇万から六〇〇万掛かるのです。その一割ですと五〇万から六〇万掛かるのですが、それを他地域ではみな積み立てて出してあります。野田の場合はその費用を全部区が持ちました。四億何千万で一件当たり六〇万、

他では下水事業の国の予算がついても自己負担が出せられなくて、なかなか事業が出来ないので。野田はそれを全部区が払っ

たために短期間のうちに下水が完成する
ことが出来たのです。土地改良事業でも同じ
ように援助しております。七億八億ぐらい
の仕事をみな野田の区が払って個人の負担
を減らす方法でやったので、いろいろ事業
がスムーズに運びました。

今まで野田は「区」という申し合わせの
組織でございました。平成一二年に法人化
致しました。「公益法人」法人になればどう
なるかと言いますと、財産の所有が出来る。
土地の所有が出来る。野田は約一〇町歩ぐ
らいの土地を持っている。その内の大半が
田原町の名義なので、田原町の名義でおく
とどうなるかという、議会で「これは田
原町の物だ」と決議されちゃうと、いくら
約束事で文書が交わしてあっても絶対多数
の議員がこうだと言うことになれば、そち
らにいったいします。これは野田の物だよ
という事で法人化して野田の実質、所有と
いたしました。これは田原町全地域そうい
うことで動きました。

それから、平成一三年野田史発行ですが、
昭和二〇年代からそういう意見があったと
聞いております。それから五〇年、私が区
に関係するようになってからも小野田先生

が何とか出したいという話があったので
すが、たまたま田原史の編纂をやっていた
目作司さんという人が、それが田原史の方
が忙しいということ、なかなか時期がな
かったのですが、今回、平成一年に小野
田先生に資金の方は何とかなるで何かし
てもらいたいと話が出来て、たまたま野田
には専門家がたくさんおりました。非常
に立派な物が出来たわけですが、そのきつ
かけの一つは、中学校の総合学習がきつ
その時分から出来た。それで子ども達
が野田の歴史やいろいろなことを聞きに
来るのですが、今までは、だいたいある
程度のものは、それぞれ年寄りから口
伝えて伝わって来たことがありますが、
もう今の時代は年寄りと一緒に寝る者
はそうおらんし、口伝えて伝えるとい
うことが分からない状況です。これは
記録に残さないといかない状況です。
これは記録に残さないといかない状況
です。これは記録に残さないといかない
状況です。これは記録に残さないとい
かない状況です。これは記録に残さない
といかない状況です。これは記録に残さ
ないといかない状況です。これは記録に
残さないといかない状況です。これは
記録に残さないといかない状況です。

それで、話は違いますが野田には
目作司さんという人が、保井の庄屋、加藤七右衛門の資料を持っていて、江戸時代の庄屋の資料になるのですが、南の金五郎の資料もあると言っています。今、県が県史の編纂をやっています五十何巻出すというので、五巻か六巻出たと思います。それで平成一年に渥美湾の漁業のことについて調査したいということ、たまたま田原史か渥美郡史を見て、調べに来た時にはそれは、クシヤクシヤとなっていて「整理したいので、どうですか」ということで、是非やってもらいたいということ、来た人のメンバーは県の編纂室の職員が付いて、後は大学の教授だとか、こういう歴史のブ

口連中が来て、博士号を持った連中が何人も来て、二年がかりで、延べ二〇日ぐら
いかけて、倉庫中を全部整備した。こりゃ
すぐく儲けたなあと思ったのです。

野田には古い資料、江戸時代の資料が残
っていると言っています。そのままほっと
きや何にもならんので、市の指導で作れ
と、そうすればそっちへ渡すよと話した
のですが、この本の裏付けも全部、ただ
「感想」とか「感じ」だけじゃなしに全
部裏付けの

ある、基になる本で出来ています。今、童浦、浦が五年も前に作り出していますが、私が相談にあって、これを見て、これはとてもじゃないけど出来んと言っていた。結局資料が残ってないので、人の口伝えだけでこう書くとしても浦だけではないので他所の先生に頼んでみたり、そういう町内を探して頼んでは作ろうと進めていると思います。

先程校長先生にも言ったように、そこら中からお褒めの言葉を頂きました、「ないか、ないか」と、これは一一五〇部作ったわけですが、瞬く間に、三日、三日で無しになっちゃいました、もう一冊もない。ただし、愛知県の図書館だとか、東三河の図書館へは無料で寄贈してあります。ここへもきつと山田先生や小学校の先生もたくさん買って頂いたし、一〇冊ぐらい来とるのではないかと思います。各クラス一冊ぐらいないかな。「あんまり無いような、図書室か、校長室に一冊あって、家には、みんな各家には一冊ずつあるけど、図書室にある。」これは寄付金で主にしたのです。これが一冊四三〇〇円ぐらい。編集者には一銭も払わないで、それで野田の区の人には一軒一冊

五〇〇円で、この内容のチラシを回覧にまわして注文をとったところ、五〇〇円で安いのので「ええ加減だ」と思われたのかな。注文が無かった。それで、一冊以外の人は二〇〇〇円、それで注文をとったところ、立派で、びっくりして「俺もほしい、俺もほしい」で一晩だけで三〇〇冊売れて、後で新聞に出たら他からやいのやいの来るので、ぜんぜん無くなった。これをまた新しく作ると五〇〇〇円、五〇〇部で五〇〇〇円掛かります。まあとても高いので、止めたほうがいいと言う事になっている。歴史書とすれば、結構断片的な編集がしてあるため、読みやすく見やすいということを専門家からお褒めの言葉を頂いています。

長々まとまりのない話をしてきましたが、もう一つ話を落としたのですが、野田で江戸時代から一番大きな事件と言いますが、「比留輪山争動」で「河合清右衛門事件」というのが、当時、何十人という野田の役員についてる人間が、寺社奉行とか老中へ直訴や駕籠訴をした。それで向こうで牢屋へ入ったり、こっちで家族が牢屋へ入れられたりして、相当長い間、難儀をして、まあ清右衛門さんが一人駕籠で送られて、大

久保境のところでは首を切られて、その首が雨ヶ森の山の頂上へ、足は大久保境のところへ、胴は柏田とかバラバラにして、その事件があります。平野屋の藤井君が真剣に勉強しておりますので、もし、そういうお話を聞くなら藤井君が一番詳しいです。

私は、この「野田史」には、せっかく清右衛門の記事が載っておりますので、何とか子孫に本をあげたいと、いろいろ手を尽くしたのです。三人かな、だいたい杉山の辺の河合、神吉に一軒、二川に二軒、一三人が野田から所払い、追放されちゃったので、静岡の小笠の辺に出て、バラバラになって、またこっちへ帰ってきて、杉山とか老津の辺へ住み着いたらしいです。で何年か後に、これが罪はなしということで野田へ帰れる状態だったので、やっぱりお殿様の目が怖くて、約束事では犠牲になった人達は、野田が全部、責任を持つと約束でやった事だったのです。しかしまた野田から出て行ったというような話でございます。非常に大きな事件で当時の人の苦勞を感じるわけです。野田では大きな事件でした。